

小学校の体育授業における効果的な課題解決的な学習の 授業づくりの手続きに関する研究

スポーツ文化研究領域

5018A061-5 藤本 晴菜

研究指導教員：吉永 武史 准教授

【問題の所在と本研究の目的】

2017(平成29)年3月に告示された小学校学習指導要領では、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を重視していくことが示された(文部科学省, 2017)。体育授業における課題解決的な学習については、その具体的な授業分析が不十分であることが指摘されてきた(上條, 1992)。このことから、児童自らが課題を発見し、それを解決するような学習過程を実践していくことに加えて、体育授業における課題解決的な学習の方法について検討をすることが求められているといえる。

体育授業における学習過程について梅野ら(1992)は、各単元の目標に対する最適な学習過程は実践研究を通して明らかにする必要があると述べている。また、高橋(1992)は、授業計画や授業成果だけでなく、学習過程に着目し、授業内の出来事を客観的に観察したり、分析したりすることが求められると述べている。従って、課題解決的な学習のあり方について検討していくためには、学習の成果だけではなく、その学習過程についても明らかにしていくことが重要であるといえる。

しかし、児童自らが課題を見付け、その解決に取り組んでいく学習過程を取り入れた体育授業に関連する資料(上條, 1992; 田中, 1991; 福富, 2018; 田邊, 2019)を概観すると、効果的な課題解決的な学習を行うための授業づくりに関する実践例は散見されるものの、その手続きの有効性について検証されているものは少なく、十分な検討が行われてきたとは言い難い。

そこで本研究では、小学校の体育授業において効果的な課題解決的な学習を行うための授業づくりの手続きを検討し、その手続きを取り入れた学習指導プログラムを作成し、その有効性について明らかにすることを目的とした。

【第1章】

第1章ではまず、体育授業において課題解決的な学習を取り入れる必要性について検討した。

学校教育では、課題解決力の育成や課題解決的な学習の導入が課題として挙げられてきたこと(中央教育審議会, 2016)や、これからは、課題解決的な学習を取り入れた学習過程をより一層重視していかなければならないこと(文部科学省, 2015)から、課題解決的な学習を取り入れた授業を実践していく必要性が高いといえる。加えて、小学校の体育授業においても、それらの取り組みが不十分であったこと(三木, 1996; 文部科学省, 2015)や、特に中学年や高学年においては、児童に課題解決的な学習を行う機会を保障することが求められていることが示された(福田, 2000; 村野井, 2009)。従って、これからの小学校の中学年や高学年の体育授業では、効果的な課題解決的な学習を行うことが求められていると考えられる。

また、効果的な課題解決的な学習のための手続きについて検討するために、これまでの体育授業における課題解決的な学習の成果と課題を分析した結果、効果的な課題解決的な学習を取り入れた授業を展開するためには、①課題の把握と適切な練習方法の選択、②教師の関わり、③学習カードの工夫、④学習資料やICT活用の4点が重要な手続きであることが示された。加えて、効果的な課題解決的な学習の学習過程については、①発見タイム、②練習タイム、③振り返りタイムの3つの学習場面を単元に組み込むことが有効であるという示唆が得られた。

そこで、上記の手続きを取り入れた学習指導プログラムを提案した。

【第2章】

第2章では、第1章で提案した課題解決的な学習の手続きを取り入れた学習指導プログラム

について検証授業①を実施し、児童が課題を把握し、適切な解決方法を選択することができたかについて検討した。検証授業①は、東京都内のM小学校の3年生29名(男子15名、女子14名)を対象に、器械運動領域における跳び箱運動の単元で実施した。

その結果、児童が自らの課題を把握し、適切な練習方法を選択する学習を行うことができていたことが確認された。また、抽出グループの映像を分析した結果、抽出児に関しても、意欲的に課題解決的な学習に取り組んでいる様子が窺えた。学習指導プログラムの成果としては、特に、児童による課題の把握と練習方法を選択において、技のポイントを限定したり、それに対応した練習方法を設定したりしたことが有効であった。また、教師の関わりに関しては、授業中、誤った練習方法を修正するための声かけを行ったり、授業前に児童の練習内容を把握したりしたことによって、児童が適切な練習方法を選択したり、課題とのズレを修正したりすることができていた。さらに、学習カードについては、課題に対応した練習方法を選択できるように工夫したことによって、課題解決的な学習が円滑に進められていた。しかし、練習タイムでは、個々の課題によって練習場所が異なってしまったため、児童同士の関わり合いが生じなくなってしまった。また、児童の中には、学習の振り返りで、自らの課題に応じた適切な練習方法を選択することができていたものの、次時にはそれとは異なる練習に取り組む児童もみられた。

以上の結果より、技のポイントを限定して課題を明確にすることの有効性や、児童の課題を事前に把握し、課題や練習の修正を行うことの重要性、学習カードの使用の有効性が示唆された。また、前回の振り返りを行い、今日の課題を確認する活動を行う工夫や同じメンバーで練習を行うための場を工夫することが課題としてあげられた。

【第3章】

第3章では、検証授業①の成果と課題を踏まえて、学習指導プログラムを修正し、東京都内T小学校の5年生20名(男子11名、女子9名)

を対象にマット運動の単元にて再度検証授業を実施し、修正した学習指導プログラムにおいて、児童が課題を把握し、適切な練習方法を選択することができていたかについて検討を行った。

検証授業①の課題の改善として、学習の始めにグループで本時に取り組む内容を伝え合う活動を取り入れたことで、児童の課題が明確になったり、学習状況を確認する手助けになったりしたと考えられる。その際、教師が各グループを巡回し、児童一人ひとりに合った学習カードを配布した。このことから、児童が前回選択した練習と本時に取り組む内容にズレが生じないようにすることができた。

また、検証授業②においては、技の種類が増えたことから、学習資料だけでは、技のイメージが想像しにくいと考えたことから、タブレットを使用してグループで互いの動きを見合う学習に取り組んだ。これによって、技に対する的確なアドバイスが増え、グループでの学習が円滑に行われていた。

しかし、検証授業②の課題として、今回作成して学習カードは、1つの技に対応したものであったことから、単元後半にかけて、技や課題を複数選択する児童も存在し、今回作成したカードでは、対応できなかったことや、学習カードにおいて、課題を明確に示すことができるような記述の問い方が課題としてあげられた。また、学習場面において、タブレットの使用頻度が低いグループは、メンバー同士の関わりが他のグループと比べて円滑に行われていない様子があった。

【結章】

本研究の目的は、効果的な課題解決的な学習の手続きについて実践的検討を行い、課題解決的な学習の手続きを取り入れた学習指導プログラムの有効性について検証することが目的であった。検証授業①と検証授業②の結果から、児童が自らの課題を把握し、適切な練習方法を選択するためには、課題を明確にするために学習や、児童の把握した課題や選択した練習方法に誤りが見られた場合に、それを修正するような教師の関わりが重要であることが示唆された。